

百濟大寺の建立と阿倍氏

The Study of Building the Kudara-ji Temple and the Abe Clan

直 木 孝次郎

一 百濟大寺と大王家

近年、考古学の発達により日本においても原始、古代の時代の思いがけぬ大遺跡の発見・発掘が報ぜられることが少なくない。その発見の多くは土地の大開発に伴うことが多く、発見の一面、十分な調査が行なわれずに消滅する遺跡も少なくなく、現状を手放しに喜ぶことはできないが、発掘による新知見によって原始・古代史の研究が進歩することは、やはり慶賀すべきことであろう。

しかしなかには土地の開発にもとづくのではなく、学問的関心から企画された発掘によって、いままで知られなかった重要な遺跡が検出されることも少なくない。一九九六年以来実施された桜井市吉備の吉備池廃寺の調査によって、百濟大寺と推定される大寺院が検出されたのは、その一例と言ってよいであろう。

今まで吉備池廃寺と仮称されていたこの遺跡は、一九九六年から九八年に至る調査の結果、版築できずかれた

卷28 Ⅲ×37 Ⅲ の面積を持つ金堂と、卷30 Ⅲ×30 Ⅲ の面積の塔を持ち、出土の古瓦から建築年代は七世紀前半と考えられる大寺院の跡であることが判明した。¹⁾この寺院の規模がそのころの寺院よりはるかに大きいことは、六四三年(皇極二) までにほぼ完成していたと思われる創建法隆寺(若草伽藍)の金堂が19.5 Ⅲ×22 Ⅲ、塔が15.9 Ⅲ×15.9 Ⅲの面積を持ち、六四三年に金堂が建立されたと伝える山田寺の金堂が16.8 Ⅲ×19.5 Ⅲ、塔が12.8 Ⅲ×12.8 Ⅲの面積であることから明らかである。発掘に関係した小沢毅氏は種々の条件を勘案して、この巨大な寺が六三九年(舒明一一)七月に造作の詔が下され、六四二年(皇極元)九月に天皇が「近江と越の丁」を發して造営を命じた大寺、すなわち百済大寺²⁾に相当するとした論証³⁾は妥当であると考ええる。百済大寺はその名にふさわしく、予想以上に大規模な寺院であったのである。

ではなぜこのような大寺院の造営が企てられたのであろうか。恐らくそれは、すでに指摘されているように、天皇(大王)家の主導のもとに企画された最初の寺であったからだろう。さきに簡単にふれて出典を示さなかったが、六三九年に舒明天皇が造作を詔したことや、六四二年に皇極天皇が近江と越の丁を發して造営を命じたことは、いずれも『日本書紀』(以下「紀」と略す)にみえて、信憑性が高い。

また「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」(以下「大安寺資財帳」と略す)には、田村皇子が天皇の位についた十一年(舒明十一年)二月に、「百済川の側に、子部社を切り排いて、院寺家、九重の塔を建て、三百戸の封を入れ賜い、号して百済大寺と曰う。(中略)後の岡基宮に御宇天皇(皇極)此を造り、寺司に阿倍倉橋麻呂・穗積百足の二人を任せ賜う」とある。右の文中、九重の塔の建立や封戸三百戸の施入など疑問の箇所もあるが、舒明とその皇后で、のち皇極となる二人の天皇によって百済大寺の建立が進められたとあることは、『紀』所伝を傍証する史料としてよいと思われる。

舒明以前も麿仏の立場をとる天皇はいなかったが、『紀』欽明十三年十月条に物部尾輿と中臣鎌子による麿仏記事

や、『紀』敏達十四年三月条に物部守屋と中臣勝海による廃仏記事を見ると、欽明も敏達も伽藍に火を放ち、仏像を堀江に流すといった廃仏派の過激な行為を黙認していたように伝えられている。欽明・敏達のつぎに即位する用明天皇は、その即位前紀に「仏法を信じ、神道を尊ぶ」とあり、やはり積極的な崇仏派とは思わない。

仏教が日本に伝わった六世紀中葉以降、七世紀初めころまで、中央の政界において仏教を信じ流布に努めたのは、通説にいうように蘇我氏およびそれと関係の深い皇族（たとえば聖徳太子）や氏族（たとえば渡来系氏族の東漢氏）などである。このころまで天皇は廃仏と崇仏の中間的立場をとり、みずから進んで仏教の流布につとめた形跡はない。舒明天皇に至ってはじめて仏教信仰に身を投じ、寺院の造営、仏教の宣布に着手したのである。⁵⁾

それは長い間の天皇（大王）家の伝統に反する行為であった。舒明が仏教の側に身を置いたのは、推古朝にはじまる隋との通航、さらに舒明二年（六三〇）の遣唐使の派遣、同四年の唐使の来朝（同時に遣唐使帰国）等によって、仏教が東アジアの全体を覆うすぐれた宗教であり文化であることを知ったからであろう。一旦それに気づくと、仏教の宣伝、流布を蘇我氏の手任せておくわけにはいかない。仏教の教権を蘇我氏から取りかえす必要のあることを痛感したのであろう。

教権をわが手に握るためには、蘇我氏の仏教が抛って立つ飛鳥寺より、さらに立派な寺院を天皇の手で造らねばならない。それが舒明・皇極の両天皇が百濟大寺という大寺院の建立を思い立った主要な理由であろう。蘇我氏は舒明からいえば一時代前の馬子の時に、一塔三金堂の本格的大陸風の寺院の建立に着手し、推古朝中期の六一〇年（推古一八）ごろにはほぼ完成している。一塔一金堂の形式⁶⁾で建てるなら、よほど壮大なものでなければ飛鳥寺に対して見劣りがする。こうして企画されたのが百濟大寺の建築プランではあるまいか。その建築に着手したのは、前記した『紀』に伝える通り六三九年（舒明一一）としてよいであろう。

二 百済大寺の建立を助けた氏族

さきに見たように百済大寺は、天皇（大王）家が仏教の後援者（大檀那）になることを明示するために企画されたのである。当時の他の寺院とは比較を絶して大きいのはそのためである。大王家の決意のほどが偲ばれるが、それにしても巨大にすぎる感は拭えない。塔の大きさを考えると、前記したように創建法隆寺の塔の基壇が $15.9\text{m} \times 15.9\text{m} \parallel \text{卷}253\text{m}$ であるのに対し、 $30\text{m} \times 30\text{m} \parallel 900\text{m}$ で、約三・六倍である⁷⁾。再建法隆寺（現法隆寺）の塔基壇は $13.9\text{m} \times 13.9\text{m} \parallel \text{卷}193\text{m}$ であるから、その約四・七倍になる。塔の高さは創建法隆寺の場合不明だが、現法隆寺は総高三四・一メートル、百済大寺の塔は完成したとすると八〇〜九〇メートルあったとされるから、現法隆寺塔の約二・五倍となる。蘇我馬子の建立した飛鳥寺は、当時としては壮麗さにおいて画期的な寺ではあったが、塔についてみると基壇の大きさは一辺一二メートルだから、基壇面積は一四四平方メートルで、百済大寺の六分の一以下である。

このような大寺院を七世紀前半の大王家が建立することができたのであろうか。大化の新政や壬申の乱を経て国家統一が進んだ天武朝以後の天皇ならともかく、諸氏族の勢力がまだ強大であった舒明・皇極朝では、百済大寺の建立はもちろん、それを企画することは大王家だけでは困難であったと思われる¹⁰⁾。この大事業に着手するには、いずれかの有力豪族の協力があつたに違いあるまい。

ではその豪族はだれであらうか。このころ有力豪族といえば第一に念頭に浮ぶのは蘇我氏だが、私見が認められるとすれば、百済大寺の建立はそもそも蘇我氏から仏教教権を奪いかえすことを主要な目的に立案されたのだから、大王家が蘇我氏の協力を仰ぐわけにはいかない。この際大王家が頼りとした豪族は阿倍臣であつたと思われる。

この氏族の活動はとくに推古紀から舒明紀に顕著である。まず阿倍臣鳥であるが、推古十六年八月に物部依網連抱とともに導客使となつて隋使裴世清の入京を迎え、同十八年十月の新羅使人入朝の際は伴連昨・蘇我豊浦臣蝦夷・坂本臣糖手の三人とともにこれを庭中に迎え、同二十年二月に欽明の妃蘇我堅塩媛を改葬するにあたっては、天皇の命を誅した。なおこの二十年二月紀には「阿倍内臣鳥」とあつて、鳥は公式には阿倍内という複姓をウジとしたことが知れる¹⁰⁾。

つぎに推古三十二年十月紀に阿倍臣摩侶が見える。大臣馬子が阿曇連(欠名)と阿倍臣摩呂の二人を天皇のもとに遣わして、葛城県を馬子に賜わることを奏せしめたとある。また舒明即位前紀では推古天皇の没後、大臣となつた蘇我蝦夷は後継の天皇を定めるのに、阿倍麻呂(原文「阿倍麻呂臣」と議して群臣を大臣の家に集めて意見を訊いたとある。この阿倍臣摩侶(麻呂)は孝徳即位前紀に蘇我本宗家滅亡後に左大臣の地位についたとある「阿倍内麻呂臣」と恐らくは同一人物であつて、やはり阿倍内という複姓であつたと考えられる。なおこの阿倍麻呂は、左大臣となつたことの見える『紀』の皇極四年六月庚戌(十四日)条の翌日の辛亥(十五日)の条に「阿倍倉梯麻呂大臣」とあるから、倉梯麻呂とも言った。『公卿補任』にも阿倍倉橋磨について、「一名内磨」と注している。

このように見てくると、大伴・物部の両有力氏族が衰えたあとの推古・舒明朝には、阿倍氏は蘇我氏よりは下位であるが、それに次ぐ有力氏族であつたことが察せられる。蘇我本宗家滅亡後、討滅に功のあつた蘇我石川麻呂を越えて麻呂が左大臣の地位を得たことも、その結果であろう。もちろんそれには、麻呂(倉梯麻呂)の女、小足媛が孝徳の妃にはいつていたことも関係するだろうが、石川麻呂の女・乳娘も孝徳の妃に立っているのである。

つぎに注意されるのは、鳥が堅塩媛の改葬に際し天皇の命を誅したことや、摩侶が蘇我馬子の依頼あるいは指示によつて葛城県下賜のことを天皇に奏上したことで、阿倍氏は天皇の側近にあつて親しい関係を持っていたのではない¹¹⁾かと思われる。ここで問題となるのは鳥や摩侶が阿倍内という複姓を持つことである。複姓として付加された「内」

の意味は、さきに論じた際(13)に紹介したように諸説があるが、鳥や摩侶が天皇に近侍する性格を持ち、内廷と関係が深いことを示すと解するのが妥当であろう。阿倍氏が内廷の雑用に奉仕したと考えられる丈部を管掌する氏族であろうことも傍証となる。

以上により私は阿倍氏の存在を重視するのだが、百済大寺の建立に阿倍氏が関与したのではないかと思うもう一つの理由は、百済大寺跡の検出された桜井市吉備の吉備池の地は阿倍氏の本拠の地と推定される桜井市阿倍に近接するからである。地図上で測定すると、吉備池は阿倍の西北にあり、その間は坦々たる平地で、距離は約七五〇メートルにすぎない。百済大寺建立の地域は阿倍氏の勢力範囲であったと考えるのが妥当であろう。そこに巨大な寺院を建てるのに、阿倍氏の関与がなかったとは考えられないのである。

阿倍氏とても勢力関係から蘇我氏の下風に立ち、摩侶は馬子の需めに応じて葛城県下賜の件を天皇に伝えたり、推古没後の皇嗣を定める会議では大臣蝦夷の令を受けて行動しているが、いつまでもそういう状態に甘んじていたとは思われない。蘇我氏に対抗心を抱き、機会を待っていたであろう。大王家は他の氏族の協力も得たであろうが、阿倍氏を最大の協力者としてその勢力範囲の地に大寺建立の候補地を求めたものと思われる。

立地についても一つ注意しなければならないのは、『紀』舒明十一年七月条に「詔りして曰く、今年、大宮と大寺を造作せむ。則ち、百済川の側(はら)を以て宮処とせむ」とあって、百済大寺が大宮(百済宮)とペアになって造営されたことである。ということは舒明の皇居も阿倍氏の勢力範囲の地に造られたことで、舒明と阿倍氏が密接であることを思わせる。

三 百濟大寺と阿倍氏・阿倍寺

以上に論じたように百濟大寺の造営には阿倍氏とくに阿倍内臣の協力があったと推定されるが、いままで述べたところはいわば情況証拠であって、具体的な根拠に欠けるうらみがある。では確かな証拠がないかというところではない。私は第一節に引用した「大安寺資財帳」の文の後半の部分に、

後の岡基宮に御宇めす天皇此を造り、寺司に阿倍倉橋麻呂・穗積百足の二人を任せ賜う。

とあることに注目する。後代、とくに百濟大寺の後身の大安寺が平城京に造営されて以後天平期にかけて、阿倍氏が大安寺に関係を持ったとは思われないから、阿倍倉橋麻呂が寺司に任ぜられたという「大安寺資財帳」の記事は疑うに及ぶまい。

寺司の職名は『紀』推古四年十一月条に

法興寺造り竟る。則ち大臣の男善徳臣を以て寺司に拜す。

とあり、同孝徳紀大化元年八月癸卯条に、使を大寺（百濟大寺または飛鳥寺）に遣わし、僧尼を喚し聚めて下した詔のなかに、

今寺司等と寺主とを拜さむ。

とある。寺の管理・運営に当る俗人の任せられる職であろう。推古四年十一月条の寺司は、蘇我馬子を中心になって造営した法興寺すなわち飛鳥寺の寺司に、馬子の男の善徳が任せられたのであるから、寺にとってはかなり重要な職であったと考えられる。

それから類推すると、百濟大寺の寺司に任ぜられた阿倍倉橋麻呂の権限も、相当に大きかったとみてよからう。そ

れ故、「大安寺資財帳」の倉橋麻呂を寺司に任命する記事は、倉橋麻呂を出した阿倍内臣の協力が大きかったことを証する史料とすることができ¹³⁾る。

ただし「寺司」という名称は実際にそのころ用いられたものかどうか疑いがある。というのは、「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」所引の丈六仏光背銘に「百済惠聰法師、高麗惠慈法師、巷哥有（明子脱カ）大臣長子名善徳爲領、以建元興寺」とあり、巷哥有明子（蘇我馬子）の男、善徳の任命されたのは「寺司」ではなく「領」または「寺領」と考えられるからである¹⁴⁾。大宝令制以前は「湯沐令」や「筑紫惣領」「伊予総領」などの職名が行なわれていたことを考えあわせると、寺司という職名は大宝令施行以後の潤色とするのが妥当であろう。従って阿倍倉橋麻呂・穗積百足が任せられたのも、百済大寺の領（寺領）であろう。しかしそれは名称だけの問題で、仕事の内容は変りない。

もう一つ注意されるのは阿倍氏の本拠、現在の桜井市阿部にあった阿倍寺のことである。この寺は、『東大寺要録』巻第六、末寺章に

崇敬寺 字阿倍寺

右、阿倍倉橋大臣之建立、

とある阿倍寺のことであろう¹⁵⁾。寺の名からしても、阿倍倉橋大臣（阿倍倉橋麻呂）の建立とする所伝からしても、阿倍氏の氏寺とみてよからう。そしてつぎに述べる発掘調査によって知られた創建年代からいって、阿倍倉橋麻呂建立の可能性は高いと思われる。

『桜井市史』上巻（一九七九年）考古学編では「阿倍寺跡」の項を立て、同寺跡について区画整理事業にともなう昭和四十年～四十一年（一九六五～六六）の事前調査の結果判明したことを、つぎのようにまとめている。

阿倍寺の創建は山田寺の創建年代（舒明天皇十三年～天武天皇七年（六四一～六七八））にほぼ等しく、その一部は藤原宮の造営（持統天皇八年（六九四））前後にまで及んだ可能性も考えられている。／また、伽藍中心部

の配置は、広義の法隆寺式に属するものと考えられており、ただ、塔と金堂の距離が約三八メートル（基壇間）もあって、法隆寺式に比べて広い空間をもっていることが指摘されている。（七四三ページ。考古編筆者は網干善教、萩原儀征、辻俊和）

右の文中、「広義の法隆寺式」とは塔を西、金堂を東にする伽藍配置をいうのであろうが、百済大寺跡の塔・金堂の関係も同じである。のみならず、塔と金堂の間隔は五四メートルあり（塔・金堂心々間距離は八四メートル）、百済大寺の規模が大きいにしても、他の寺院にくらべて広すぎる感があることも両寺院は共通する（現法隆寺の場合、塔と金堂の距離一三・五メートル、心々間距離三一・五メートル）。同時期に建てられた両寺の平面プランにこのような類似が認められることは、両寺の建立が相互に関係の深いこと、すなわち阿倍内臣が百済大寺の建築に深い関係を持つことの物的証拠とすることができる。

つぎに百済大寺に阿倍氏がかかわったことの直接の証明にはならないが、阿倍倉梯麻呂が仏教信仰を持っていたことを示す史料を挙げる。周知のことだが、『紀』大化四年二月条に、

阿倍大臣、四衆を四天王寺に請じ、仏像四軀を迎え、塔の内に坐せしむ。

とあるのがそれで、関連する記事が鎌倉時代に僧顯真によって撰せられた『太子伝古今目錄抄』に見える。その中の「塔内四天事」の条に「壇上小四天、阿倍大臣建立歟」とあり、つぎに「大同縁起」を引いて、

小四天四口、阿倍大臣敬請者。

とある。難波の四天王寺の五重塔に大四天王四口と小四天王四口があり、小四天王は阿倍大臣が献じたというのである。大化四年紀にいう阿倍大臣献納の「仏像四軀」に相当するものであろう。

また四天王寺の南、大阪市阿倍野区松崎町二丁目と三丁目の境界近くに南北二か所の土壇・礎石と、複弁八葉蓮花文軒丸瓦など白鳳期の瓦を出土する遺跡がある。付近に「阿部寺」「東阿部寺」「西阿部寺」の小字名があるので阿部

寺廃寺と呼ぶ。阿倍氏の一族の氏寺とみてよからう。

阿倍氏がいつから仏教信仰を持ったかは不明であるが、百済大寺の建立に協力したことが、この氏族の仏教信仰を高めるものになったと考えたい。

むすび

六三九年以降、大王家による百済大寺の建立が企画・実施されたことの政治的意味と、雄族阿倍氏がこれに協力したことについての私見の概要を述べた。大王家と阿倍氏の関係が百済大寺の建立を介して緊密になったことが、いわゆる大化の新政やそれ以後の政治の展開に影響するところは少なくないと思うが、詳細については別の機会に譲り、古代では政治と仏教の関係の密接なことを再確認して、蕪稿を閉じることとする。

注

- (1) 小沢毅「吉備池廃寺の発掘調査」(『仏教芸術』二三五号、一九九七年一月)、現地説明会資料「吉備池廃寺——巨大な塔基壇の発見」(奈良国立文化財研究所・桜井教育委員会、一九九八年三月)。以下吉備池廃寺および同時代の寺院に関する数値は、おおむね上記両論考による。
- (2) 「百済大寺」の名称は、『紀』では皇極元年九月乙卯条の分注に見える。
- (3) 注(1)の論考の論証。その結論に従い、本稿では吉備池廃寺を百済大寺と認定して論ずる。
- (4) たとえば田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』(吉川弘文館、一九八〇年六月)一一六・一五八ページ。
- (5) 田村圓澄著書(注(4))参照。
- (6) 飛鳥寺が一塔三金堂、川原寺が一塔二金堂で、それ以外の寺々(創建法隆寺・現法隆寺・四天王寺・中宮寺等)は多く

一塔一金堂である。

- (7) 創建法隆寺の塔基壇の数値は、掘込地業よりの推計であるから、多少正確さを欠くであろう。
- (8) 塔の高さは注(1)の現地説明会資料に依る。それによると、日本最大の塔である東大寺の東西両塔はそれぞれ一〇一・六メートル、一〇一メートルの高さという。
- (9) 大脇潔『飛鳥の寺』(日本の古美術14、保育社、一九八八年)による。
- (10) 古代国家の最盛期である聖武朝でさえ、東大寺大仏の造営に際し、一枝の草、一把の土を以て造像を助けることを人民に呼びかけ、『東大寺要録』には多くの地方有力者からの錢貨・物資の寄進を受けたことが記録されている。
- (11) 関晃「大化の左大臣阿倍内麻呂について」(関晃著作集第二巻『大化改新の研究』下、一九九六年)、初出は一九五九年。直木孝次郎「大化改新私見」(直木『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館、一九九四年)、初出は一九七八年。
- (12) 阿倍氏の性格については、大塚徳郎「阿倍氏について」(『続日本紀研究』三巻一〇・一一号)、志田諄一「阿倍氏」(志田『古代氏族の性格と伝承』雄山閣出版、一九七一年)参照。
- (13) 注(11)の拙稿。
- (14) 『紀』舒明前紀に、蘇我大臣蝦夷は阿倍麻呂臣と議して群臣を大臣の家に聚めて饗応し、「食訖りて散れむとするに、大臣、阿倍臣に令して、群臣に語らしめて曰く云々」とある。
- (15) 倉橋麻呂とともに寺司に任せられた穂積百足は、天武元年六月の壬申の乱に際し、近江朝廷から興兵使として飛鳥古京へ遣わされたことがみえる。皇極元年(六四二)から壬申の乱の年(六七二)まで三〇年である。引き続き朝廷に仕えられない年月ではないが、長すぎる感もある。大化五年(六四九)に阿倍倉梯麻呂が没したのち、斉明朝に寺司(領)に任命されたのかもしれない。
- (16) 直木孝次郎「大宝令前官制についての二、三の考察」(直木『飛鳥奈良時代の考察』高科書店、一九九六年)を参照されたい。初出は一九七八年。
- (17) 文献にみえる安倍寺に関しては、福山敏男『奈良朝寺院の研究』(高桐書院、一九四六年)に詳しい。
- (18) 『大阪市史』第一巻(大阪市、一九八八年)六八五ページ以下。筆者は中尾芳治。